

特集 『道徳科学の論文』を現代によみがえらせる試み

相互依存のネットワーク、 地球システム倫理そして最高道徳

岩 佐 信 道

目 次

はじめに

1. 相互依存のネットワーク
2. 地球システム倫理
3. 最高道徳
4. まとめ

はじめに

研究センターのゼミは、これまでの3年間、「『道徳科学の論文』を現代によみがえらせる試み」という共通テーマを掲げてきた。このようなテーマに取り組む場合、一方では、80年以上前に書かれたこの著作の最大の価値もしくは魅力は何か、という観点と、他方で、今、現代社会が最も切実に求めているものは何か、という観点を併せ考察することが有効ではないかと考え、このような研究テーマとした。第一の観点についていえば、廣池千九郎が『道徳科学の論文』で明らかにした最重要点は、第二版の自序文で明示したように、人間を宇宙の一つの現象ととらえ、「天地自然の法則に従う」ことの意義を明らかにし、その内容を「相互扶助の原理」（相互依存のネットワークの中で生きる人間の生き方）として示したことといえるのではなかろうか。そして、廣池が最高道徳として具体的に明らかにしたものは、まさにその内容であったということができる。

他方、第二の観点からすると、21世紀の今日、人類は、地球温暖化をはじめとする環境問題、核兵器や生命操作などの科学技術による文明の歪み、宗教対立によるテロや暴力の発生など、極めて深刻な問題に直面している。地球的問題群とでも呼ぶべきこうした諸問題は、地域、国家、文化、文明などの個別の枠内にとどまっていたのでは解決できず、必ずや、地球全体を一つのシステムとしてとらえ、考察しなければならない、という認識が定着してきている。これが、地球システム・倫理学会が2006年に発足した際の基本的な考え方である。

そこで、廣池が『道徳科学の論文』で明らかにした最高道徳は、上記の2つの観点にかかわる極めて重要な人間の生き方であって、それは、個人の幸福実現のための道徳原理という以上に、地球上の人類が切実に求めている地球システム倫理の実質をなすものとして、今日、真剣に見つめ直す必要があるのではないか、ということを考えてみたい。

1. 相互依存のネットワーク

(1) 廣池の提示した相互扶助の原理

廣池千九郎は昭和3年に『道徳科学の論文』を公にしたが、もし彼が、昭和9年以降に、それに匹敵するような新たな本格的論文を書いたとすれば、そこでは、相互扶助の原理が前面に出てきたかもしれないというのが筆者の考えである(岩佐、2010)。いいかえれば、廣池が『道徳科学の論文』に込めたメッセージの中で、極めて重大な意義をもつものは、この相互扶助の原理ではないかと考えられるのである。では、廣池が相互扶助の原理と呼んだものは何であるかといえば、それは、この宇宙が組織されている原理のことであり、万物が相互に助け合ってこの宇宙が組織されている事実を意味している。まず、これに関して『道徳科学の論文』の昭和9年に出された第二版の自序文の最初の部分から引用しておこう。

天地剖判して宇宙現出し、森羅万象この間に存在して、いわゆる宇宙の現象を成すに至れるは、偶然にして然ることは出来ないのである。必ずやその原理もしくは法則ありてここに至れるものである。故に宇宙間に産出してこの間に生存するところのわれわれ人間としては、この宇宙自然の法則に従わねばならぬことは明らかであります。この故に聖人はこの宇宙自然の法則を天地の公道とも称せられたのである。……しこうして諸聖人躬親らこれを実行して、われわれに御示し下さったのであります。……

さて「天地の公道」すなわち「人間としては何人も行わねばならぬところの道」と申すのは、この宇宙の組織されておる原理を指すので、その原理と申すは、万物相互に助け合うこと、すなわち相互扶助の原理によりて、万有が階級的にもしくは平等的に調和し、もってこの宇宙が組織されておることであるのです。……

そこで、一例を挙げれば、たとえば、動、植、鉱物相互に交換作用を発揮して、あるいは階級的に、あるいは平等的に、相寄り相助けて存在し、動物の仲間はまたその仲間が相互に交換作用によりて、あるいは階級的に、あるいは平等的に相寄り相助けて生存しておることであるのです。(廣池、1985、①p. 1-3)

廣池がこのような道徳の包括的原理として相互扶助の原理をあげるのは、『道徳科学の論文』の第二版の自序文が初めてである。しかし、それ以前の昭和3年の初版においても、既にその考え方の具体的内容は、ふんだんに取り上げられている。すなわち、その第3章では、森羅万象が互いに連絡し合っている事実を専門家の文献を駆使しながら提示しており、それらを自分の言葉で次のように要約している。

この宇宙の内容はこれを科学的に観（み）れば、一つの系統をなして森羅万象みな連絡しておるのであります。とくに地球上の生物は、ただにその形体の連絡せるのみならず、その生活機能もまた互いに連絡しておるのであります。一例をあぐれば、動物の吐きたる炭酸ガスは植物の食物となり、植物の吐きたる酸素は動物の食物となり、また動物および植物の有機的部分の腐敗せるものは相互にその食物となり、また有機物は無機物中に生じてこれに依拠して生活し、無機物は有機物の生存活動によりて変化を起し、また有機物の機能を失うて死する場合には、無機物に還元同化する所以であります。(廣池、1985、① p. 106)

最近の科学はかくのごとく宇宙の渾一（こんいつ）たることを事実の上に証明するに至ったのであります。しかのみならず、最近の生理学・生物学および実験心理学の進歩は、動物および人間の精神作用と肉体との連絡を証明し、また人類学および社会学的研究の極致は、人間各個の精神作用もまた相互に連絡しておいて、人間の道徳的精神および道徳的行為は、ことごとくその真相が他人の心に映じて親疎（しんそ）の区別を生じ、これがために各人の結合もしくは分裂、幸福もしくは不幸の差異を生ずることが明らかになってきたのであります。(廣池、1928、① p. 107)

このように、廣池が『道徳科学の論文』の第3章から第7章において諸科学の成果をふまえて提示している内容には、後に「相互扶助の原理」という言葉で呼ぶことになる材料が列挙されており、それらは、この原理を構成する要因として、次のような内容にまとめることができる。

- ①宇宙の内容は、一つの系統をなし、森羅万象はみな連絡している。
- ②生き物（動植物）の間、もしくは生き物と自然の事物との間にも相互依存関係がある。特に生き物同士の間には、対等な（平等的）関係のみならず、弱者対強者という（階級的な）関係も含まれ、吞ぜい（一方が他方を食べる）作用さえこれに含まれる。
- ③宇宙万有の一部である人間は、宇宙のすべてに関係をもつとともに、人間相互間にも関係をもっている。
- ④人間の社会を構成するものは、精神的相互作用もしくは精神面における個人間の機能的相互依存関係である。
- ⑤この相互依存の関係は、ただ空間的な広がりだけでなく、時間的なひろがりを持ち、一切の現在と未来および過去を結合している。(麗澤大学道徳科学教育センター、2009)

ちなみに、筆者が「相互依存のネットワーク」と呼んでいるのは、私たち人間が置かれているこのような包括的なつながりのことである(岩佐、2004)。廣池が、人間を宇宙の一つの現象ととらえ、「宇宙自然の法則」もしくは「天地の公道」に従って行動することが必要である、という時、それは、私たち人間が、以上のような相互依存のネットワークの一員として生きているという自覚に基づいて行動することを意味しているのである。そして、廣池のもう一步踏み込んだ説明によれば、それは、「自我を離れて、かかる真理(相

互扶助の原理)を物質的だけでなく、精神的に、人心の開発を目的にして行う」ことであり、「人間が利己的本能を去って、純真至誠の精神にて、比例的慈悲もしくは比例的待遇を実現して、人心の開発を目標に努力する」ことである。廣池が、膨大な『道徳科学の論文』において体系化しようとしたのは、まさにこのことであり、それを彼は最高道徳と呼んだのである。

こうして、第二版の自序文において、宇宙の現象として生存する人間の生き方について、宇宙自然の法則に従うことの必要性から説き起こす廣池は、人間社会においてこの宇宙自然の法則に従う生き方を最もよく体現したのは、人類の教師とも呼ばれる世界の諸聖人であったと認識し、最高道徳の具体的展開のよりどころをそうした聖人の生き方に求めるのである。そして、そうした最高道徳の内容は「千種無限であれど、これを概括すれば、おおよそ5か条となる」として、自我没却の原理、神の原理、義務先行の原理、伝統の原理、人心の開発もしくは救済の原理の5つを列挙し、簡単な説明を加えている(廣池、1985、①p. 29)。このように、最高道徳を簡潔に5つの原理で表現するのは、『道徳科学の論文』では、昭和9年の第二版の自序文が初めてであるとしても、その初版において該当する各原理の説明は、多くの場合、人間が宇宙の一員として生きていることから説き起こされているといえる。そこで、次の節では、相互扶助の原理に従った生き方もしくは相互依存のネットワークの一員としての生き方として展開された最高道徳が、地球システム倫理という概念とどのように関わるかをみていこう。

2. 地球システム倫理

(1) 地球システム・倫理学会の発足とその基本的な考え方

現在、道徳科学研究センターの顧問であり、国際比較文明学会の会長ならびに終身名誉会長など、比較文明文化という領域において世界的に重要な役割を果たしてきた伊東俊太郎東大名誉教授は、2006年に発足した地球システム・倫理学会の会長として、会報創刊の辞で次のように述べている。

われわれはいま、21世紀の初頭に立って、人類と地球の未来を真剣に憂う事態に直面しています。地球温暖化をはじめとする環境問題、生物種の絶滅など生態系の危機、核兵器や生命操作などの科学技術による文明の歪み、宗教対立によるテロや暴力の発生など、人類史に未だかつてなかったような、見通しのつかない不穏な時代に突入しています。この危機的状況を克服して、これからの人類存立を後世に確保してゆくためには、もはや、1地域、1国家、1文化、1文明にとどまっては解決できず、まさにそれらの問題を地球的連関において考察し、そのシステムとしての倫理をあらためて構築してゆくほかはないでしょう。このような地球的問題群の解決に向かって、自然・人類・文化・文明の新しい在り方を創り上げるために、その間の調和的「地球システム倫理」を構想し、実践してゆくことは、これからの人類の喫緊の課題であります。(伊東俊太郎、2006、p. 1)

ここで注目すべきは、比較文明の領域における世界的権威である伊東教授が、今日の問題は、一つの文化、一つの文明の見方にとどまっていたら解決することができないと言明し、それらを包括する地球システムという観点から問題を考える必要を強調されていることである。つまり、人間の生き方、倫理を、地球システムという極めて広い観点からとらえることが、喫緊の課題というのである。これは、現代世界における極めて重要な宣言といえるであろう。そして、前節で述べたように、廣池千九郎の相互扶助の原理、もしくは相互依存のネットワークの考え方は、「宇宙の内容はこれを科学的に観（み）れば、一つの系統をなして森羅万象みな連絡している」という事実に基礎をおいており、そこから人間の生き方を考える最高道徳は、まさに地球システム・倫理学会が意図しているものに合致するものといえるように思われる。この点を、まず、地球システム倫理は、そもそもどのような要件を備えていなければならないかという角度から考えてみることにしよう。

(2) 地球システム倫理に求められる要件

①地球全体を視野に入れた考察

上記の創刊の辞で強調されているように、地球システム倫理を構想し、実践してゆくに当たっては、まず、国家や文明といった枠にとらわれることなく、一つのシステムとして、地球全体を視野に入れて問題を考察することが第一であろう。人間は、自分の属するグループや置かれている立場から物事を見る傾向が極めて強く、自分とは異なる立場からの見方は、理解したり、考慮することがなかなかできない。いわんや、ものごとの全体を視野に入れて考えることは非常に困難なことである。そのために、異なるグループの人々や見方の異なる人々同士の間では、けんかや争いをはじめ、さまざまな問題が生じることになる。これは、個人の間だけでなく、集団の間でもそうであり、むしろ、その広がりが大きくなればなるほど、問題は深刻になってくる。地球システム倫理を構想するということは、そのような人間の傾向を自覚して、異なる集団の立場を理解するだけでなく、地球全体がどうなっているか、という観点で物事を考えることが求められるのである。

なぜ地球全体を視野に入れることが必要かといえば、それは、地球が一つのシステムであるからである。地球が一つのシステムであるということは、私たち人間を含めて、地球上のすべての存在は、他のすべての存在と密接につながっているということである。このことを、人間が生きているということを例に考えてみよう。まず、人間が生きているためには、空気、水、食べ物など、さまざまなものが必要である。私たちが呼吸するということは、体内に酸素を取り入れることであるが、その酸素は、地球上の植物の光合成によって提供されている。その植物が生長するためには、大地、水、養分、適当な温度、太陽の光などが必須である。私たちの食べ物の多くは、動植物などの生き物であり、人間は地球上の数多くの生き物を食べている。また、私たちの生活は、地球上の他の人々によって生産、加工されたものに依存しているといっても過言ではない。このように、日常の生活一つをとってみても、私たちは、地球上のすべての人々、すべての事物、そして太陽のような地球外の事物と密接なつながりをもっていることは明らかである。こうして、「地球システム倫

理」の第一の要件は、地域、国家、文明といった部分的な枠にとらわれることなく、一つのシステムとして地球全体を視野に入れて問題を考察することが求められているといえる。

②人間中心主義でなく、地球上のすべての生き物、それを支える事物の尊重

私たち人間は、とかく自分の立場で物事を考え、自分さえよければよい、と考えがちである(岩佐、2007)。この自己中心的考え方は、一つのシステムとして地球全体を視野に入れて問題を考察する地球システム倫理と正反対の考え方ということができ、どのような努力をしても、克服すべき考え方といえる。物事を、1地域、1国家、1文化、1文明の枠内にとどまって考察することも、程度の差はあれ、自己中心的態度といえるであろう。

そこで、地球を一つのシステムとしてとらえる倫理を構想する場合、システム中のすべての存在は、それぞれ、それなりの存在理由があると考えられるがゆえに、地球上のすべての存在に対して、それぞれ適切な配慮が求められることになる。いいかえれば、地球上のすべての存在は、それぞれの立場によって、役割や重要性は異なるとしても、それぞれの存在を軽んじるべきではないのである。つまり、私たち人間が、高度の意識を持ち、優れた精神生活が可能で存在であるとしても、その人間の考えですべてを自由に扱ってよいことにはならない。むしろ、人間は地上で最も多くの恩恵を他の生き物や他の事物から受けている存在である。したがって、この地球上で共に生存を許されている他の生き物に対して、敬意をもち、それらの存在によって自らの生存も可能となっていることに対して、感謝の気持ちをもつことが求められるのである。

また、たとえ、人間がすぐれた精神能力をもち、科学的知識をもっているとしても、そのすぐれた力によって、地球上の資源や環境を自分たちの思いのままにすることはつづまなければならぬであろう。むしろ、自分たちは、多くの存在によって生かされている地球の一員にすぎないという謙虚な態度をもつとともに、地球というシステムの一員であるという責任の自覚を持って行動することが求められるのである。

③大自然の万物を育む心

地球が一つのシステムであるということは、地球上のすべての存在は、互いに一定の調和を保って存在しているものとみてとることができる。その自然の姿は、人間の目から見れば、公平無私とも、全ての存在を公平に生み、育み、成長させる働きとも見ることができる。私たち人間にとって、このような大自然の働きは、すべての生き物、すべての人間に対する広く、深い慈愛の心と受け止め、その働きを、生活の中で実現することが求められるであろう。

④抽象的理念にとどまらず、日々の生活に密着した生き方に

地球が一つのシステムであることを踏まえた私たち人間の倫理は、単なる抽象的理念ではなく、厳然たる事実である。私たち人間は、この事実を虚心に見つめ、上記の①

から③までに示された要件を日々の生活の中で真剣に実践することが求められるのである。

(3) 対症療法から人間観の変革へ

今日、私たちが直面している地球的問題群の最たるものは、環境問題ということができ、具体的には、地球温暖化、砂漠化、森林破壊、大気・淡水・海水・土壌の汚染、水不足、生物多様性の危機などがあげられよう。前ユネスコ事務局長、松浦晃一郎は、これら問題に対処するための「持続可能な発展」には、「教育と文化」が決定的な鍵であるとし、「真の責任ある倫理の基礎を築く」ことの必要を強調している（松浦、2009）。またこうした諸問題に対して、各分野の専門家が真剣な提案をしているにもかかわらず、世界の多くの人々は、必ずしも、その生き方を真剣に変革しようとはしていないように思われる。世界の一部で、ある問題に対して真剣な努力が払われ、事態が改善の方向に向かうとしても、他の地域では、別の問題がますます深刻化してしまうというのが実情である。もし、このような状況が今後も続けば、この地球は確実に荒廃の一途をたどるであろう。結局、地球的問題群の根本的解決の為には、それぞれの問題の現象面への対処だけでなく、私たちの基本的人間観の変革が不可欠である。「モグラたたき」ゲームの比喻でいえば、頭をもたげたモグラをいくらたたき続けても、モグラは次々と別の穴から頭をもたげるのである。問題の根本的解決は、いわば、地中のモグラを退治することである。それは人間の利己心、もしくは自己中心的傾向を直視し、それをどのように克服していくか考えることではなかろうか（岩佐、2011）。

この点、地球システム・倫理学会でも、さまざまなことが提言されているようである。たとえば、地球システム・倫理学会の会報第一号における「もったいない」、「慎みの心」、「稲作漁撈文明」などの提案もそうであろう。しかし、それらは地球上の一部の人々の考え方や生活の仕方であり、それを異なる文化の人々に採用させるにはかなり困難がともなうであろう。また、そのような考え方や生活の仕方を採用することによって、地球環境全体の問題に対応することは果たして可能なのであろうか。ユネスコから出版された *Making Peace with the Earth* の中で、生物多様性の問題を扱ったミシェル・ロローがその論述の最後に到達した結論は、「科学的生態学の知見を組み入れた新しい倫理学が求められている」であった（ミシェル・ロロー、2009、p. 113）。しかし、それでは遅すぎるのではなかろうか。松浦元事務局長も「真の責任ある倫理の基礎を築く」ことが必要と強調しているが、それはどのように達成されるのであろうか。

結局、ここでの根本的な問題は、それらの問題に取り組む人間の側の基本的態度、特に基本的人間観が従来のものである、ということにあるのではないと思われる。つまり、地球上のほとんどすべての人々は、人間は基本的な権利をもっており、他人に迷惑をかけるなければ、何をしてかまわない、という個人主義的人間観に基づいて、経済的豊かさや自己および自己所属の団体の立場を主張し、利益の獲得に向かって突進している。地球社会の一員として、日頃の自分の生き方、自分の行動を根本から反省、検討することはほとんど

ど行われていないように見える。今重要なのは、全ての人々が真剣に受け止めることができるような人間観の変革をどう進めていくか、ということであろう。その点で、モラロジー研究所の顧問であったジョセフ・ラワリーズ博士が、モラロジーの体系の中に cosmic modesty (宇宙の前における人間の謙虚な態度) の考え方を見出したことは注目に値すると思われる (J. A. ラワリーズ、1977、1980、1981: 岩佐、2012)。

地球システム倫理を構想しようとする場合、以上のような観点は、極めて重要な意味をもつと思われる。そして、廣池千九郎が、80年以上前に執筆した『道徳科学の論文』をみる時、そこに示されている考え方は、まさに伊東教授がその必要性を強調している地球システム倫理の概念と符合していることに驚かされるのである。すなわち、廣池の「宇宙の内容はこれを科学的に観(み)れば、一つの系統をなして森羅万象みな連絡しておるのがあります」という言明や、「最近の科学はかくのごとく宇宙の渾一(こんいつ)たることを事実の上に証明するに至った」といった言明は、まさしく地球システム倫理の概念を先取りしているというほかないのである。したがって、廣池が、相互扶助の原理の実質的内容として示した最高道徳の原理は、まさに地球システム倫理の具体的展開の実例として、世界の人々に真剣に受け止められるべきものと考えられるのである。

3. 最高道徳

これまで述べてきたように、『道徳科学の論文』の初版に提示された最高道徳の内容は、昭和9年の第二版の自序文では、5つの原理として簡潔に紹介されている。そして、その順序はすでに言及したように、自我没却の原理、神の原理、義務先行の原理、伝統の原理、人心の開発もしくは救済の原理、の順である。しかし、『道徳科学の論文』で、最高道徳を本格的に論じる「第14章 最高道徳の原理・実質及び内容」の構成は、必ずしも、上記のような自我没却の原理で始まる順序にはなっていない。たとえば、第14章の序論的な4つの項に続く第5項は、「最高道徳の基礎的観念の第一は正義及び慈悲にあること及びその両者の作用」と題されており、自我没却に関する論述は、第7項で初めて出てくるのである。そこで、最高道徳の要点を5つの原理で説明する場合、なぜ自我没却の原理が最初の原理となるのかという問題について一つの見方を示した上で、各原理を「相互依存のネットワーク」の一員としてのモラルの観点および地球システム倫理の観点から概観することにしよう。

(1) 最高道徳の5大原理の順序——自我没却が最初にくるのはなぜか

昭和5年に発行された『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』(註:以下『特質』と略記)では、最高道徳の内容が自我没却の原理、神の原理(註:ここでの神という言葉の使用が、特定の宗教に基礎を置くものでないことは後に述べる)、義務先行の原理、伝統の原理、人心の開発もしくは救済の原理の5つの原理で説明され、それが『道徳科学の論文』の第二版の自序文における最高道徳の説明でも踏襲されている。ちなみに、『特質』の「第9章 最

高道徳における最高品性を形作る順序」では、最高道徳がこの5つの原理からなることを次のように説明している。

最高道徳とは天地自然の法則の事にて、宗教的に云えば神の心とか神の法則とか云うものであります。……其實質と内容とは極めて深淵複雑且つ高尚にして一々其細目を挙ぐることは出来ませぬが、之を約めて申しますれば自我を没却して自然の法則に従い慈悲の心を起こして義務を先行し、真に温、良、恭、儉、讓の人となりて伝統に仕え、人を愛し、而して其の自己の実行の精神を他人の精神に移植して、其の他人の精神を開発し、且つ救済する事であるのです。(廣池、1938、p. 160)

この第9章の冒頭では、最高道徳を実行しようとする場合、従来の因襲的道徳を確実に実行することが大切で、その上で、最高道徳に進むことの重要性が強調されている。したがって、因襲的道徳を大切にすることから出発しながらも、それだけでは精神作用において不十分であるがゆえに、まず自我没却の必要性が説かれていると考えることができよう。このような観点は、『道徳科学の論文』の第14章以前の構成からも肯ける。すなわち、たとえば『道徳科学の論文』の第7章で、人類における道徳の発達、変遷を跡づける文脈で、因襲的道徳がどのような変遷を経て今日に至ったかを、人間の自己保存の本能に言及しながら考察し、また、第10章では、因襲的道徳の本質を分析し、そこには自己保存の本能と利己的精神が働いていて、道徳として不十分であることが指摘されている。こうして、因襲的道徳の不十分さが明らかにされた上で、第12章と第13章で最高道徳の実行者としての諸聖人の生き方が提示されるのである。『道徳科学の論文』の中核である第14章では、そうした記述をふまえて、最高道徳の原理・実質及び内容が論じられるのである。このような事実を考えれば、最高道徳を実践的観点から説明しようとする場合、まず、現実の人間を直視し、因襲的道徳における不完全な部分を克服する意味で、自我没却から出発することはごく自然の展開といえるであろう。

(2) 「相互扶助の原理」の観点からみた最高道徳の五大原理

しかし、廣池が、『道徳科学の論文』の第二版の自序文の冒頭で、宇宙現象の一つとして地球上に生存する人間は、宇宙自然の法則に従う必要があることを強調し、その内容として相互扶助の原理もしくは相互依存のネットワークという考え方を提示したことに注目してきたこの小論の立場からすれば、最高道徳の説明を、人間が自己の不完全さを見つめることから出発する自我没却の原理でなく、人間は、万物を生成化育する大自然もしくは大宇宙に抱かれていることに気づくという意味での神の原理から始めることも可能ではないかとも考えられる。次のような事実を目を向ければ、このような見方が必ずしも的外れではないように思われる。

まず、既述のように、『道徳科学の論文』において、もっぱら最高道徳の原理・実質・内容を扱う第14章は、必ずしも、自我没却から始まってはいない。つまり、第14章で最初に最高道徳の内容を論じる第5項の第1節では「正義および慈悲の淵源」という表題の下に「学問上より見たる神の本質」という説明が付されている。これは、最高道徳の第一の

基礎的観念である正義と慈悲の概念を明らかにすることは、廣池にとって神の本質を明らかにすることを意味するのである。その間の事情を、廣池は次のように説明する。

古来、世界の諸聖人及び大識者は一般に神〈本体〉の本質をもって正義及び慈悲となしておるのであります。……しこうして真の正直者はただ神のみであって、人間は必ずしも正直ではないのであります。また真の慈悲はその正直にして公平なる神の心に存するのであります。人間は必ずしもかくのごとくではありませぬ。故に、真の正義及び慈悲は結局、神の心に淵源するものであるということが出来ます。かくて、いわゆる最高道徳の実行とは実にこの慈悲と正義との両者を適当に調和し、かつ適当なる方法によって、これを人間社会に実現することにあるのです。(廣池、1985、⑦ p. 50~51)

このように、最高道徳の第一の基礎的観念である正義と慈悲の淵源は神もしくは本体であり、「神を信じる」という意味での最高道徳の実行は、正義と慈悲を適当な方法で人間社会に実現することであるというのである。

さらに、『道徳科学の論文』の第二版出版の翌年、すなわち昭和10年に書かれた『神壇説明書』という小冊子は、神の本質を明らかにしているが、そこでは、最高道徳の5つの原理に関係する内容が、次のような表現と順序で示されている。すなわち、

- (一) 天地の法則をもって心となす、
- (二) 自我を没却して天則を発揚す、
- (三) 伝統を祖述して義務を先行す、
- (七) 人心を救済して品性を完成す、

である。

これらの点を考える時、最高道徳の5つの原理を、自我没却の原理、神の原理、義務先行の原理、伝統の原理、人心の開発もしくは救済の原理の順でなく、神の原理、自我没却の原理、伝統の原理、義務先行の原理、人心の開発もしくは救済の原理の順にとりあげることも、それなりの意味があるように思われる。そこで、以下では、これらの最高道徳の原理が、1文明、1文化、1宗教といった限定的な規準に基づくものではなく、常に宇宙の一員としての自覚、いいかえれば、一つのシステムとしての地球上に生存する人間としての自覚に基づいていることに着目しながら、各原理をこの順番に簡単にとりあげていこう。

①大自然の万物生成化育の心、すなわち、すべてに対する公平な慈愛の心を学ぶ(神の原理)

ここでは、廣池が「神の原理」と名付けた内容を最高道徳の最初の原理に位置づけることにするが、今日では、「神の原理」という表現は、特定の宗教的信仰を連想させる懸念があるため、「慈悲実現の原理」と呼ばれるようになっている。

ところで、廣池は昭和11年正月に書いた扁額において、「麗澤」という言葉の意味を説明して「麗澤とは易の語にして、太陽天に懸かりて、万物を恵み、潤し、育つる義なり」

と述べている。この文章は、廣池が万物を生成化育する大自然の働きを太陽に代表させて表現したものと考えることができるであろう。なぜなら、太陽の光は太陽系の他の惑星にも届いているが、生命が存在し、繁栄しているのは水の惑星といわれる地球だけである。結局太陽の光のほかに、水、大地、大気などのすべての要素が調和した大自然がすべてのいのちを育てているのである。人間にとって、この大自然の万物生成化育の働きこそ、いのちとすべての価値の根源であるということができ、また、この働きをすべてに対する公平な慈愛の心として受け止め、人間の精神において実現することこそが、宇宙の一員としての人間のモラルの出発点といえるのである。

このような万物生成化育の心、すなわちすべてに対する公平な慈愛の心について、廣池は『道徳科学の論文』で、次のような論を展開している。最高道徳の基礎的観念の第一としての正義と慈悲の概念をとりあげた第14章第5項で、正義の観念を自然法の観点からとりあげ、さらに、正義を宇宙的正義と人間のもしくは社会的正義に区別し、宇宙的正義の本質を聖人の教説・事績を基礎にして、慈悲と一体であるとの議論を展開している。

また、この原理に関するもう一つの項である第8項は「最高道徳は絶対神の存在を認む」と題されており、人間にとって神を信じるとはどういうことを意味するかについて、神、宇宙根本唯一の神、宇宙の本体、聖人の教説などにふれながら、人間が神を信じる事の意味を明確にしている。そうした記述の主な部分を列挙しておこう。

最高道徳は宇宙根本唯一の神の心を体得実現せる世界諸聖人の実行せるところの道徳に一貫せる最高原理であります。故にその当然の結果として神の存在を認むるのであります。しこうして、いわゆる宇宙根本唯一の神は宇宙の本体を指すのであります。(廣池、1985、⑦ p. 221)

現代の科学は、明らかに宇宙自然の現象にその法則あることを発見して、各科学の原理を確立して進みつつあるのです。……しこうしてこの自然及び人為の法則をもって宇宙的精神の作用と見なすことは学問上あえて差し支えはないことでありましよう。しからは、人間は、直接に本体を認めることをえざるも、その本体の作用を認めて、その因果律的確偉大な勢力を崇拜して、これを神と思惟することは不合理な思想もしくは観念ではありますまい。(廣池、1985、⑦ p. 223)

神の実質は世界諸聖人の教説、教訓及びその実行上に一貫するところの事績より推せばいわゆる慈悲であるので、その作用はいわゆる自然の法則であるのです。……されば神を信ずるといふ事は神の定めたる法則すなわち道徳を実行することであります。(廣池、1985、⑦ p. 239)

最高道徳において神を信ずるといふことは神の法則を信ずることであります。神の法則とは自然の法則にて、すなわち宇宙の因果律であります。しかしこれは純物理学的因果律のみでなく、人間の精神作用及び行為の因果律をも含むのであります。(廣池、1985、⑦ p. 243)

こうして廣池は、結局、神を信ずるといふことは神の定めたる法則すなわち道徳を実行することであるといふのである。さらに、廣池は、『特質』において、神の実質としての慈

悲の精神を人間の日常生活で実践するための指針として、慈悲の内容を十か条の項目で具体的に説明している。ちなみに、その第一は、「すべて人間を愛する事を目的として、金銭、物品もしくは事業を次とする心」であり、第二は、「必ず公平にかつ普遍的に人類を愛する事であり、……人種とか国とか宗教とかの区別なくこれを愛すること」であるとしている。

このように、廣池は、天地自然の法則もしくは神の心に従った生き方としての最高道徳の核心を慈悲の心として詳述するが、最高道徳の実質、内容の展開という点でもう一つ重要なのが、『道徳科学の論文』の「第二巻 最高道徳の大綱」である。その前半の目次の構成は極めて重要な事実を物語っているように思われる。すなわち、「慈悲にして寛大なる心となり、かつ自己に反省す」という格言は、廣池が大正4年、最も困難な境遇の中で体得した最高道徳の真精神を表現するものである。したがって、廣池は、唯一この格言だけを「最高道徳実行の第一根本精神」とし、「父母の心をもって人類を愛す」をはじめとする5つの格言を「最高道徳実行の第二根本精神」としてあげている。このことから、人間の慈悲心に焦点を当てた「慈悲にして寛大なる心となり、かつ自己に反省す」の格言が、最高道徳においていかに重要な位置づけにあるかがわかる。

しかし、ここで注目すべきことは、次に示す「第二巻 最高道徳の大綱」の目次が物語るように、廣池は、これら最高道徳実行の根本精神を第3章に位置づけ、その前に「第2章 最高道徳実行の根本原理」を立てているのである。そして、そこには3つの格言が列挙されている。すなわち(1)「深く天道を信じて安心し立命す」、(2)「現象の理を悟りて無我となる」、(3)「自ら運命の責めを負うて感謝す」の3つの格言である。特に(1)と(2)の格言は、人間の生き方の根本原理として、人間が宇宙の一員であるという広い視野に立ったとらえ方そのものといえるであろう。

『道徳科学の論文』第二巻 最高道徳の大綱の目次(註：前半部分のみ)

第一章 最高道徳実行の諸項目の制定さるるに至りし原因及び順序

第二章 最高道徳実行の根本原理

(一) 深く天道を信じて安心し立命す

(二) 現象の理を悟りて無我となる

(三) 自ら運命の責めを負うて感謝す

第三章 最高道徳実行の第一根本精神

慈悲にして寛大なる心となり且つ自己に反省す

第四章 最高道徳実行の第二根本精神

(一) 父母の心をもって人類を愛す

(二) 我これをなすにあらずして、ただこれに服するのみ

(三) 他を救うにあらずして己を助くにあることを悟る

(四) 意なく必なく固なく我なし

(五) 大法は心にあり小法は形にあり

まず、(1)「深く天道を信じて安心し立命す」という格言について、廣池は次のような説明をしている。「天道は中国語にして、神道もしくは天理等と同じく、神の法則すなわち換言すれば自然の法則ということであります(廣池、1985、⑨ p. 285)」と述べ、この天道もしくは宇宙自然の法則に従って最高道徳を実行すれば必ず幸福になるという人間の精神作用と行為に関する因果律を確信することが重要である、というのである。続いて(2)「現象の理を悟りて無我となる」の格言について、廣池は次のように述べる。「我々人間は宇宙現象の一つとしてこの地球上に現れてきて、かつその宇宙の勢力に支配されておるものなれば、すべて自然の法則すなわち神の真意に従うほか、方法なきことを自覚するのが、最高道徳実行の根本原理であります(廣池、1985、⑨ p. 286)」と。

さらに、(3)「自ら運命の責めを負うて感謝す」の格言については、廣池は「自己の運命の成立せる原因を悟り、しこうしてその運命改善の責任を自己に負うて感謝生活をするということは、人間生活の根本を自覚したものというべきであります。ゆえに、この自覚は最高道徳実行の根本原理をなすものであります(廣池、1985、⑨ p. 286)」というのであるが、ここで「運命」ということも、(2)の格言の「現象の理……」で廣池が指摘するように、「我々人間は宇宙現象の一つとしてこの地球上に現れてきて、かつその宇宙の勢力に支配されておる」ということと深いつながりのあることであり、廣池のこうした受け止め方には、宇宙の一員としての人間の立場の自覚が徹底した形で展開されているということができようであろう。

このように廣池にとって、天道とは、ほかならぬ宇宙自然の法則のことであり、それに従うということは、聖人たちが自ら実行して示した最高道徳を実行することであった。そして、それは、宇宙の一員として生きる人間の最も価値ある生き方であるとともに、そのような生き方は、宇宙自然の法則に守られるという確信につながるのである。したがって、廣池は「最高道徳を実行すれば人間は必ず幸福になる」と強調する。

このような廣池の宇宙自然の法則のとらえ方は、学問としてのモラロジーの特色の一つである因果律の考え方に深くかかわっている。すなわち、廣池は、『道徳科学の論文』の第一巻第一章の最初に、モラロジーを「因襲的道徳及び最高道徳の原理・実質及び内容を比較研究するとともにその実行の効果を科学的に証明しようとする新科学」と定義している。廣池にとって、この因果律の存在に関する確信は、宇宙の一員としての人間の生き方の基本であり、この点の重要性は、『道徳科学の論文』第一版自序の最初の段落で次のように訴えていることから明らかである。

現代の精神科学においては人間の精神作用及び行為に因果律の存在することを疑い、且つ道徳もしくは不道徳の実行の報酬はおのおのその実行当事者の負担するところに係り、しかのみならず、その当事者の受くるところの報酬は、その相手方及び第三者の受くるところの報酬よりも更に大なることを証明する学問及び教育これなきが故に、世界人類の大多数はただ単にあらゆる知力及び政策に依拠して、自己及び自己の団体を利せんとするの傾向を生ずるに至れるなり。もし人間にしてかくのごとくそ

の精神作用及び行為に因果の法則なしと思うものあらば、その人はいかに知的に政策を弄して道徳的行為を現すも、これみな虚偽の行動にすぎず。しこうして現代にはかかる虚偽の人間はなほだ多し。

されば、今日かかる人間の虚偽を矯正し因果の法則を確信するところの真人間を作るにあらずんば、個人ならびに社会の真の安心及び幸福をば実現し得ざるべし。(廣池、1985、① p. 85~86)

廣池は、『道徳科学の論文』の第一巻最後の「第15章 最高道徳実行の効果に関する考察」で因果律をあらためて体系的に論じるのである。

②自己中心的な心の克服に努める（自我没却の原理）

すでに述べてきたように、『道徳科学の論文』の最高道徳の原理・実質・内容を論じる第14章より前の章は、人間の道徳の変遷を取り上げ、因襲的道徳は、人間の自己保存の本能を基礎にしていることが詳しく論じられている。そこで、たとえ、人間が宇宙の一員としての自覚に立ち、慈悲の心を実践しようとしても、やはり人間の現実としての自己中心的な傾向を直視する必要があるのである。この自己中心的傾向もしくは利己心が地球的問題群の発生の根源である。この事実を直視し、自己中心的な心の克服の努力をすることが、慈愛の心実現の基礎である。これこそが、地球システムの一員として人間観の変革であり、地球的問題群への対処の出発点といえるであろう。

最高道徳の各原理が、単なる人間社会の慣習としての道徳ではなく、宇宙の一員としての自覚に基づくモラルであることは、この自我没却の原理についても明らかにうかがうことができる。たとえば、廣池は、第14章の第7項において自我没却を論じる中で、その意義を次のように表現している。

私ども人間は、……この宇宙の自然界に発生したる現象の一つであって、この自然界の支配を受けて生存競争もしくは変化を遂ぐるのであります。且つ私ども人間は、他の無機物もしくは有機物と異なり、自由意志を有して、外界の勢力に適應することを得れど、それもある程度までにして、絶対的のものでなく、ついに自然の勢力に対しては、ほとんど無力のごとくに屈服せねばならぬのであります。

ここにおいて、人類は、つとに聖人の教説に基づきて、その大自然の本体（神）に信頼してその生存を全くせむとしたのであります。……

しこうして、いまモラロジーは、当該見地より、全世界の人類に向かい、これをして世界諸聖人の教説を尊重し、且つ公平無私なる科学の教うることを顧み、各自の学力・知力・体力・金力及び権力にのみ依拠することをやめ、ただ一意専心に、大自然の根本法則すなわち神の法則に合致することに努力させようとするのであります。

(廣池、1985、⑦ p. 170~171)

さらに、続けて

故に聖人はこの原理を悟って教えを立て、人間をして小我を捨てて大我に同化しつつ努力せしむるよう教えたのであります。(廣池、1985、⑦ p. 172)

③恩人の系列を尊重し、それに報恩する（伝統の原理）

人間社会には、大自然の万物生成化育の働きを担い、私たちの生活を支えている存在がある。それは、今まで私たちの生活を肉体的、社会的、精神的領域で維持、発展させてきた大切な存在であり、その大きな恩恵に気づき、感謝と報恩を心がけることが、宇宙の一員としての人間の重要な生き方である。『道徳科学の論文』第14章第9項では、その重要な恩人の系列（line of succession）を表す述語として ortholonin という言葉を作り、日本語では「伝統」という言葉を充てている。そして、次のように述べている。

最高道徳にて「伝統」と申しますのは、神〈本体〉および聖人よりその精神を受け継ぎておるところの一つの系列の総称であります。いまこれによれば伝統とは我々人類の肉体的および精神的生活を創造し、もしくは進化せしむるところの純粹正当の系列を指すのであります。故に、これは重大なる人類社会の根本的法則であります。かくてこの系列に属する先行者全部は我々人類の生活の根本をなすものでありますから、実に人類に対する大恩恵者であります。されば、最高道徳にていわゆる伝統は人類の生活上重大なる意味を有しておるのであります。（廣池、1985、⑦ p. 261）

さらに伝統報恩に関して次のように述べている。

伝統に対する報恩の原理の第一は、万物がこの宇宙間に現出し、我々人間がその中に生まれ出で、かくて生物の法則により、旧は新を育て、新は旧を養い、漸次にこの宇宙を開拓するところの事実すなわち真理さらに換言すれば人間が天功を助くるところの宇宙間の系列の一員としての義務を尽くさねばならぬという事実を大悟し、しこうしてその真理大悟の結果としてその根本を培養せむと欲するに至るところの人間社会における公明正大なる自然的道徳法であります。（廣池、1985、⑦ p. 270）

ここには、重要な恩人の系列に対する報恩ということが、「宇宙間の系列の一員としての義務」という表現で説明されている。ここにも、最高道徳の主要原理としての伝統の原理が、極めて広い視野からとらえられていることが顕著に示されている。

④恩恵者にならい、進んで自己の務めを実行する（義務先行の原理）

この義務先行の原理は『道徳科学の論文』では第14章第6項で集中的に扱われている。そこでは、まず人間の幸福上第一の要件はその人格及び権利の程度を高めることにあるが、そのためには人格及び権利の発生の原理を知悉してその原理に適応しなければならないということから出発する。そのために廣池の専門であった中国法と最近諸科学の結論から、各個人の人格・権利及び境遇はその人の精神作用と行動によるもので、人間一切の権利は、義務先行の精神作用および義務的行動より生じるものであることを論じている。ここには、法律上の権利に関連して、権利は義務の先行より生じるという義務先行の原理の一面が色濃く反映されているといえるであろう。しかし、ここでいう義務先行の原理は、必ずしも法律論だけでなく、宇宙の一員としての人間のモラルという考え方が明瞭に提示されている。廣池は次のように述べている。

聖人の教説および実行によれば、私どもの生命・財産および自由は神の所有であります。〈第3章に人間は自然の中から生まれ出でたという事実に一致す〉しかるに私どもはこれを放縱的に使用せる故に解脱とか贖罪とかの必要が起こったので、これをもって私どもの一切の権利もしくは幸福は、自ずからその義務を先行するよりほかに方法なきことに帰するのであります。すなわち語をかえていうならば、人類の一切の行為は、結局当該負債償却のためでなければならぬのでありますから、私どもの精神作用および行為は常に義務先行的でなければならぬのであります。(廣池、1985、⑦ p. 141~142)

しかるに、ここで改めて注目すべき点は、上記「伝統に対する報恩の原理の第一」として述べていることに深く関係している。すなわち、「旧は新を育て、新は旧を養い、漸次にこの宇宙を開拓するところの事実」を「新」の側からみれば、伝統に対する報恩ということになるのであるが、その「新」もいつまでも「新」であり続けることはなく、いずれ「旧」の側に立って、次の「新」を育てる立場になるはずである。したがって、上記の報恩の原理は、立場を替えれば、次のように変換されて、義務先行の原理の基本ということになると考えられる。すなわち「人間が天功を助くるところの宇宙間の系列の一員としての義務を尽くさねばならぬという事実を大悟し、しこうしてその真理大悟の結果として新しい世代もしくは他を育成しようとするに至るところの人間社会における公明正大なる自然的道徳法であります」と。

このように考えると、ここでいう義務先行の原理も、権利は義務の先行より生じるという法律論の側面よりも、「天功を助くるところの宇宙間の系列の一員としての義務」の面が大きくクローズアップされるのである。

⑤他の人に同じような心を育むことに努める（人心開発・救済の原理）

この人心開発・救済ということに関しては、『道徳科学の論文』では「第14章 第10項 最高道徳は純粹正統の学問に依拠して人間の精神に対し真の開発をなすことを究極の目的となす」と「第11項 最高道徳の実行は自己の救済さるることに帰着す」で扱われている。他の4つの原理に比して圧倒的に多くの頁数がこの2項にあてられていることから、この原理の重要性がうかがわれる。また、相互依存のネットワークということから考える時、既述の第二版自序文に明らかのように、廣池は、人心開発・救済をその究極の原理と考えていたことがわかる。いいかえれば、人間が宇宙の一員として、天地の法則に従うという意味での最高道徳実行の最終段階は、この人心開発・救済をめざして努力することであることがわかる。すでに一度ふれた文章であるが、この原理が究極の原理であるという観点から、その要点をもう一度とりあげてみよう。

「天地の公道」すなわち「人間としては何人も行わねばならぬところの道」と申すのは、この宇宙の組織されておる原理を指すので、その原理と申すは、万物相互に助け合うこと、すなわち相互扶助の原理によりて、万有が階級的にもしくは平等的に調和し、もってこの宇宙が組織されておることであるのです。……人間が自我を離れ

て、かかる真理を物質的だけでなく、精神的に、人心の開発を目的にして行う場合に、「人間が天地の公道に従うた」と申さるのであります。すなわち、人間が利己的本能を去って、純真至誠の精神にて、比例的慈悲もしくは比例的待遇を実現して、人心の開発を目標に努力する場合には、はじめて「人間が天地の公道に従うた」とい得るのであります。(廣池、1985、① p. 3～4)

ここからは、地球システムの一員として生きる人間のモラルの考え方の積極的かつ徹底的な展開として、宇宙自然の法則に従うということ、いいかえれば、天地の公道に従うということの最終的段階は、以上のような宇宙の一員としての人間の自覚に基づく生き方が地球上のすべての人々に理解され、共有されるようになることを目指して努力することであることがわかる。これこそ、人間観の基本的な変革につながるものといえることができる。

4. まとめ

廣池千九郎がモラロジーによって提示した最高道徳をここまでみてくると、そこに見られる宇宙の一員としての自覚という考え方は、ただ言葉どおり、広大な宇宙を前にして、人間がちっぽけな存在であるという認識に基づく人間の謙虚な態度・生き方、というだけではないのである。そこにある宇宙とは、ただ天文学的な宇宙、つまり、マクロ・コスモスだけでなく、ミクロ・コスモスも含まれ、人間を含むすべての存在がそこにあるのである。そのような宇宙に対して、精神をもった人間が、自己の立場を正しく理解し、すべての存在に対して、適切な関わりをもつということをもって最高道徳と呼ぶとすれば、それはまさに地球システム倫理の徹底的な展開といえるであろう。

一般に、人間が何らかの対象と関わる際の関わり方を考える時、そこには、大きく3つの関わり方があるように思う。第1は、対象の存在を知らず、無知・無関心の特徴とする関わり方である。第2は、対象の存在は知っているが、その関わりは部分的な場合である。自分に必要な限りで対象を理解し、利用しようとしたり、「敬して遠ざける」といった態度はこの部類の関わり方であろう。そして第3は、対象の存在を知り、大きな関心をもって対象を理解しようとする場合である。廣池は、「宇宙自然の法則に従う」といい、「天地の公道に従う」ということを繰り返して述べているが、「従う」ということは、その対象との関わり方でいえば、第3の関わり方といえるのではなかろうか。そして、このような関わり方こそ、最も人間にふさわしい関わり方といえるように思う。

廣池が、「宇宙自然の法則」、「天地の公道」に従う道として示した最高道徳の原理は、最も徹底した意味での地球システム倫理の具体的展開といえるように思う。

参考文献

廣池千九郎 (1985) 『新版道徳科学の論文』モラロジー研究所 (初版、1928)

廣池千九郎 (1938) 『新科学モラロジー及び最高道徳の特質』モラロジー研究所 (初版、1930)

- 廣池千九郎 (1976) 『復刻版廣池千九郎モラロジー選集第三巻』モラロジー研究所
- 伊東俊太郎 (2006) 「創刊の辞」『地球システム・倫理学会会報第1号』地球システム・倫理学会
- 岩佐信道 (2004) 「道徳教育に関する一考察—相互依存関係の受け止め方に焦点を当てて—」『モラロジー研究 No. 54』モラロジー研究所
- 岩佐信道 (2007) 「自己中心的傾向の克服についての一考察」第49回総会論文集、日本教育心理学会
- 岩佐信道 (2010) 「相互依存のネットワークの中で生きる人間のモラルとしての最高道徳」『廣池千九郎の思想と業績—モラロジーへの世界の評価』モラロジー研究所
- 岩佐信道 (2011) 「地球システム倫理と麗澤大学における道徳科学教育」『言語と文明』9巻、麗澤大学大学院言語教育研究科
- 岩佐信道 (2012) 「J. Lauwerys の cosmic modesty の考え方と廣池千九郎の宇宙自然の法則」『言語と文明』10巻、麗澤大学大学院言語教育研究科
- 松浦晃一郎 (2009) 「はじめに 地球との和解」『地球との和解—人類と地球にはどんな未来があるのか』ジェローム・バンディ編、服部英二・立木教夫監訳、麗澤大学出版会 (原文は2006)
- 麗澤大学道徳科学教育センター (2009) 『大学生のための道徳教科書』麗澤大学出版会
- ラウリーズ, J. A. (1977) 「民主主義教育とモラロジー」『社会教育資料第71号』モラロジー研究所
- ラウリーズ, J. A. (1980) 「国際社会とモラロジーの役割」『社会教育資料第76号』モラロジー研究所
- ラウリーズ, J. A. (1981) 「人生の意義」『モラロジー研究 No. 10』モラロジー研究所
- ミシェル・ロロー (2009) 「私たちはなぜ生物多様性のことを心配しなければならないのか—生態学と倫理学の出合い」『地球との和解—人類と地球にはどんな未来があるのか』ジェローム・バンディ編、服部英二・立木教夫監訳、麗澤大学出版会 (原文は2006)

(キーワード：廣池千九郎、相互扶助の原理、人間観の変革、宇宙の一員)